

「これ」 

This title is meaningless when seen out of context

明地 洋典

Hironori Akechi

京都大学

Kyoto University

akechi@cogn.jp

概要

ヒトのコミュニケーションでは同じ記号が文脈によって異なる意味を伝える。この文脈依存的コミュニケーション形式は、ヒトにとっては、文脈を通して意図を明示、推論することが情報伝達性の面で効率的であることを示している。近代的なコミュニケーション状況では文脈が欠けやすく、非協力的になりやすい。未来のコミュニケーションの場を設計する上では、文脈を補填し、協力的な性質を引き出す工夫を施すことが重要になるだろう。

キーワード：コミュニケーション、文脈、意図、指示詞

1. ヒトは文脈を通して意図を明示・推論し、意味を伝える

ヒトのコミュニケーションは文脈依存的である。どのような言語でも、指示詞（日本語ではいわゆる「こそあど言葉」）のような極端に文脈依存的な言葉が存在する。文脈依存的でないように思われる固有名詞、たとえば「アルバート・アインシュタイン」でさえ、様々な意味（たとえば「天才」「お茶目な人」）を伝え得ることを考えると、ヒトのコミュニケーションにおいては、言葉は厳密な意味で「符号化」されているのかどうかも疑わしい。文脈依存的であるということは、不確実性があり、また、推論を要するということである。それでも問題なく意図を伝え合えるのは、文脈の用い方には前提があり、ある種の原理に従って記号を表出、解釈するからであろう。そのような前提として、発話は協力的に情報伝達性を考慮して行われることが挙げられる[1]。また、指示詞とともに指さしがよく使われるように、文脈依存的な言葉は意図が明示され、推論されることによって、非曖昧化され、意味が伝達される。では、なぜそもそもヒトのコミュニケーションは文脈依存的になったのか。

2. 文脈依存的な言語は意図明示によって情報伝達を効率化する

ヒトにおけるコミュニケーションの文脈依存性は、情報伝達の効率化に寄与している。あらゆる言語やコミュニケーションの体系は、効率性を考慮すると、文脈が意味に関する情報を伝達する限りにおいては、記号自体は曖昧になる[2]。文脈を介したコミュニケーションが効率的であるためには、文脈的情報を意図伝達に有用な形で用いることができなければならない。そして、実際にヒトは、多くの場合、「これ」というような非常に文脈依存的な言葉を情報伝達のためにうまく使用することができている。「これ」が何を指すかは、話し手が何を見たり指さしたりしているか、その発話の直前まで何を対象に話していたかなどの文脈を考慮しなければ、明確に定まらない。意味の特定には意図の推論が必要である[3]。話し手は合理的かつ協力的であり、その視線や身ぶりでも明示している物以外を意図して「これ」と発話することはないことを前提にしなければ、「これ」の候補はこの世界（もしくは話し手の空想の世界）に存在する、あらゆる物になってしまう。逆に言えば、指示詞「これ」のような極端に文脈依存的な言葉がどのような言語にも存在するのは、ヒトがそのような文脈依存的な言葉や言語の性質から利益を得ているからに他ならない。実際に、指示詞のような極端に文脈依存的な言葉と指さしのような意図明示の手がかりをともに用いることにより、情報伝達が効率化され得ることが明らかになりつつある[4]。ヒトは与えられた文脈を用いるだけでなく、自ら文脈を作り出すことによって、文脈依存的な言語をうまく意図の伝達に利用している。

3. 近代的なコミュニケーション状況では 文脈が欠けやすく、齟齬が生じやすい

近代的なヒトのコミュニケーションでは、文脈が欠けやすく、非協力的になりやすいため、齟齬が生じやすいことが考えられる。従来のヒトのコミュニケーションは、顔見知り同士で行われ、時空間、文化的・言語的慣習などを共有していることを前提とした対面での形式が前提であった。近年では、技術の進歩により、時空間、文化、言語の違いを超えたコミュニケーションが可能であり、様々な水準において文脈が欠けやすい。ヒトのコミュニケーション形式が文脈を情報伝達に用いる能力、意図の明示と推論を前提にしていることを考えると、文脈が欠け、誰に対してどのような意図で発した言葉であるかが明らかでない状況でのコミュニケーションは、齟齬が生じやすいはずである。たとえば、Twitter のつぶやきは、多くの場合、誰に対しての発話であるのか明確ではない。また、多くの場合、表情や身ぶりなど、感情的な情報を伝達するのに適した手がかりが欠けている。文脈が欠けやすい状況では、意図を伝えるのに文脈的情報が十分ではないことを考慮し、発信者も受信者も文脈を意識的に補填することが重要であろう。また、匿名性を保ったままコミュニケーションを行うことが可能であるため、ヒトのコミュニケーションの基盤である協力性も欠けやすい。ヒトの協力的社会は、評判を介した互惠性によって成り立っているとされる。匿名であることにより、コミュニケーションは利己的なものになりやすく、判断に繋がりがやすくなってしまう可能性がある。

4. 未来のコミュニケーションに向けて

未来のコミュニケーションを考える上では、対面でのコミュニケーション場面から離れるほど、ヒトのコミュニケーションの前提や基盤が欠けやすくなることを意識し、また、コミュニケーションの場や技術を作るときには、文脈がうまく補填され、共有基盤が形成されやすい工夫、また、ヒトの協力的な性質を引き出す工夫を施すことが重要になるだろう。コミュニケーションには本質的に労力が伴う。しかし、ヒトにおいては、コミュニケーションは互惠的な営みであり、社会参加の手段でもある。未来のヒトのコミュニケーションがその本質を見失わないよう、いまこそ、コミュニケーションを重ねる必要があるのかもしれない。

文献

1. Grice, H. P. (1975) Logic and Conversation. In *Syntax and Semantics* (eds. Cole, P. & Morgan, J. J.), pp. 41–58. New York: Academic Press.
2. Piantadosi, S. T., Tily, H., & Gibson, E. (2012) The communicative function of ambiguity in language. *Cognition*, 122, 280–291.
3. Kaplan, D. (1989) Afterthoughts. In *Themes From Kaplan* (eds. Almog, J., Perry, J., & Wettstein, H.), pp. 565–614. Oxford: Oxford University Press.
4. Akechi H. in prep